

## 田辺元とピエール・ジゼルにおけるイエス・キリスト問題

韓 亨模 (ハン ヒョンモ) (京都華頂大学)

「イエス・キリスト問題」は、極東アジアの多宗教状況において発展してきたキリスト教のアイデンティティの問題と直結している。近代期以後、三位一体のレジームが解体されつつある。その中でイエス・キリストの媒介的な機能を強調する立場はトーンダウンしつつある一方、イエスの実体化・人格化が進んでいるといえよう。これは今日発生しているキリストの偶像化の問題と、キリスト教信仰の保守化の問題、そしてキリスト教の暴力の加速化の問題と連動される。

以上のような背景から、研究者は、「イエスはキリストだ(Jesus is the Christ)という、神学的なそして宗教哲学的な命題が、極東アジア的ポストモダンにおいて、どのような新たな意味を持つのか」という命題を考え直すこととなっている。

田辺元は、イエス自身がメシア(キリスト)であるという自覚からメシアになったのだと分析している。田辺元はイエス・キリストを「絶対無の弁証法的転換が起こる場」と理解する。一方、スイスの現代神学者ピエール・ジゼルは、イエスはキリスト教の創建者ではなく、「キリスト教の中心人物」だと理解する。

本発表の目的は、田辺元とピエール・ジゼルのキリスト教論の比較批判研究を通して、ポストモダンの極東アジア的宗教状況におけるイエス・キリストのイメージを新たに提案することにある。これにより、田辺元のキリスト論が、イエス・キリストを「絶対無の絶対媒介」と結びつけ、ポストモダンの極東アジア的状況における宗教哲学および哲学的神学の形成のために、今日必要とされている新たなキリスト論的想像力を提供できよう。

この研究ではまず、『キリスト教の弁証』(1948年)などに登場するキリスト論の分析を出発点とする。そのうえで、これを通じてあらわになる田辺元のキリスト教論の可能性と限界を明らかにしたい。その限界を超えるために、ピエール・ジゼルの「解体主義的な方法論」を援用する。